
君との距離

ギン狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君との距離

【Nコード】

N1874B

【作者名】

ギン狐

【あらすじ】

真夏の神社で出会った、二人。。。恋とゆうものが切ないものならば、あれは恋だっただろうか？

1話（前書き）

んー…これは自分のために作った小説なんで…お気に召さないかたもいると思いますが、読んでくださると幸いです

1話

初夏の夏休み。

蝉声が聞こえる神社の前。

あなたはそこに居た…。

私と神社までの距離。

それは、あなたと私との距離…。

2話

そこは…

町の人だけが知ってる。

いや、もう町の住人すら、あまり関心を持ってないようだ。

みんな、此処のことを忘れてゆく。

みんな…此処に思い出がないから？

ポツリと建っている

小さな神社。

神社の周りは、一面、森だった。

陽が差すわけでもなく
そこは

日陰だらけの神社。

蝉の声。

生温い風が頬を掠める。

私は口ずさむ。
ある歌を――……。。

しかし、それは蝉の声で掻き消された。

あの日のように。

あの日も、今日のように、蒸し暑い日だった。

そう、彼と出会った…
あの日も。。。

今日のように、蒸し暑く、ギラギラとした太陽が、顔をだしていた。

そして、今日のように蝉の声が聞こえた。

あれから…どれくらいたっただろうか？

あれから、私は変わったのだろうか。

あなたと出会った…

あの日。

あの場所で、

あの日のことが、私の中で駆け巡る。

私は知らず知らず、あなたと出会った神社の前にいた。
鳥居の手前で、立ち尽くした。

ああ、懐かしい。

辺りが歪み。

ふ、と体が重くなった。

蝉の音が頭に響く。

私は……

3話

太陽がギラギラと、この町を照らしていた。

それに加えて

蝉の声が小玉する。

「あつゝい!!」

私をイライラさせる原因。それは、真夏の熱さと蝉の声。

多少の熱さは耐えられる。しかし、今年は去年の倍 熱かった。

ついでに蝉の声も。

鳴き声が鬱陶しかった。

歩くたび乾く喉。

頭の中は真っ白。

肩まである髪も、熱苦しく感じる。

「ハア、なんで、こんな熱いの？田舎だから？」

もう、自分で何を言ってるかもわからなかった。
思考回路0とは、こうゆう事だと改めて知った。

ポツリと…

小さな神社。

通り^{すが}縫ろつと、神社の前を通る。

神社の周りは森。

森の木が葉をなびかせた。

「小娘：今にもバテそうな顔だね」

耳元で声がした。

「え？」

振り返ったが、周りには誰も居なかった。

「ひひ…こっち、こっち」

神社の前で、手招きをしている少年。

「な、なんですか!？」

「おいで…」

彼は、そう言った。

しかし、私の足は前へと行かない。
警戒してるから？

「そこは熱い…こっちで涼みな」

その淡々口調の後、私は前へと足を進めた。

鳥居の前に立ち。

——少年を見た。

「来ないのか？」

彼は足をくみ、ポケットに手をつ込んで、石段に座っていた。

「……」

私は、鳥居を潜り、彼の前に立った。

「やあ」

4話

声をかけてきた少年は…

首筋まで伸びた銀の髪。

白い肌に細い指。

低く淡い声。

白のシャツにズボン。

普通の少年だった。

ただ、人とは違うところが一つ。

彼は顔を隠すが如く、猫の面をしていた。

「座りな…小娘」

彼は挨拶をした後、そう言った。

「小娘じゃないわ。私、16歳よ？」

「驚いた…同い年か…」

彼は、口に手を当てる動作をした。

「あなた…意外に毒舌ね」

「すまない…つい」

「ま、良いけど。小娘ってゆうのは止めてくれない？」

「…わかった」

「私、神野 ゆかり。あなたは？」

「……サク」

「よろしくね…サク」

「ああ…？」

私は握手をしようと、手を差し伸ばした。

サクは少し戸惑い、私の手の平を軽くパンと叩いた。

「なに、今の？」

「……挨拶」

「今のが…？」

「ああ」

私はサクの隣に腰を下ろした。

そして、近くにあった木の枝を手に取り、ブラブラとさせて言った。

「あのね、私の名前の“ゆかり”ってゆうのは漢字では…」

「こう書くの。これで“縁”よ」

私は枝を土に当て、“縁”とゆう漢字を書いた。

「ほう…」

「サクは？」

私は枝をサクに渡し、問い掛けた。

サクは“縁”と書かれた文字の横に枝をあてた。

「サクってゆ 漢字は…花が咲くの“咲”だ」

「そうなんだあゝ良い名前ね」

「ありがとう」

「…女の子らしい名前だけど」

私はわざと、聞こえるように言った。

「……………え？」

「ふふ、冗談よ。さっきのお返し」

5話

「ねえ、咲は此処で何してたの？」

「……何も」

「ふうん」

「…此処、落ち着くから」

「物好きね。神社が好きなんて…」

「ひひ、そうか？」

「おっと。もう、女は帰った方が良くんじゃないか？」

空が夕焼け空に変わった。青色からゆつくりと、薄暗いオレンジ色へと染まる。

しかし、帰れ、と言われる程、暗くはなかった。いや、それどころかまだ、明るいほうだった。

「私まだ、大丈夫よ？」

「いや、そうじゃなくて…あんまり暗くなるとお化けでるぞ」
「ふふ、わ、わかったわ…今日は帰るから」

「あ？ああ…気をつけて」

「ありがとう」

私は神社の鳥居を潜る前に、もう一度、振り返った。

「ねえ、咲…明日も来ていい？」

「来たかったら…おいで。相手ぐらいしてあげるさ」

そして、鳥居をくぐった。

「お化け…か、咲って案外子供じみた事 言うのね」
縁は帰る道中、くすくすと笑い呟いた。

「どこの子だろう？見かけない子だったなあ」

石ころを蹴りながら、歌を口ずさんで、家へと帰った。

「たっ だいまゝ」

「よう、早かったな」

「あ、里兄さと…」

「お、なんだ？」

「ねえ、都会の人って…面とかを付けて、顔を隠したりするもの？」

「ぷっ…はははは！…何ぢやそりゃ…初めて聞いたぞ？そんな事…」

里兄はお腹を押さえ、大笑いをしながら、廊下を転び回っていた。

「はあ…もういいよ」

6話（前書き）

あ——書いてて、わくわくする。。。でも、ネタがア＊ 評価、ご感想
を書いてくださると幸いです。。。

6話

コンコン

「縁々さつきは悪かったってば！！許してくれよ」

部屋の前で、兄が笑いを堪えて、謝っていた。

「怒ってないよ！！呆れてるだけっ…」

「はあ…縁、言つとくけどな、都会の奴らは、面なんて付けてないからな！！」

「なんで、そんな事言い切れるの？」

「だって、おまつ…そんな面付けるとか…舞踏会じゃないんだから…な！？」

「あ、そうよね」

「だろ！？」

「じゃあ…妖怪だったのかしら？」

少しの沈黙がし、それを破ったのは兄だった。

「ようかい？おまえ…どれだけ幻想的なんだ！？」

「ほっといてよ！！バカにしたくせに」

「俺は妹の事を思っ…」

「じゃあ、妹として兄に忠告しとくわ。これ以上、この面のことを

誰かに喋ったなら、里兄とは今後一切喋らない！！+里兄の秘密をバラマいてあげるわ…」

「うつ…」

兄が、後退りした音が聞こえる。

まあ、実は、秘密というわりには、大層な弱みなど持っていないかった。

と、いうより、知るはずなかった。

私は兄に対しても…いや、男の子に対して、無関心だったから、というのもあった。

「はあ、面のことがバレたら……」

私は、親の顔を想像した。特に、母を…。

「ああ、…考えただけで、ため息がでるわ…」

まず、初めに母が泣き崩れる顔が浮かんだ。

それから、手を引っ張り、私を病院へと…いや、いや…。

ピシャ

と、いう小さな音で、私は想像をシャダンした。
それが、一番の策だった。

まあ…明日になれば…

7話

家の中はクーラーでひんやり。

外はジメジメと蒸し暑かった。

私は、ひんやりと冷たい小さな西瓜すいかを持って、昨日と同じ道を歩いた。

さつきから、右を見れば森。

左を見れば、田んぼ。

後ろを見れば、家。

前を見れば、山と道。

と、いう状態が続いていた。

それもそのはず、私が住んでる町は、“都会”と言うには程遠い、
田舎。

当たり前のことだった。

神社が見えた。

私は鳥居の前に立った。

咲は…昨日と同じところに、座っていた。

「今日も来たね…」

「駄目だった??」

「いや…」

「ふふ、ジャーン!!」

「おお、西瓜か」

「そう!!」

「有り難い」

「いえ、いえ」

私たちは石段に座り、西瓜を口にした。

赤くて、甘くて…。

涼しそうな色の西瓜。

「なあ、縁。この…西瓜、少しあげていいか？」

「…誰に??」

「此処の主…」

「勿論、良いわよ」

「すまない。いつも世話になっているから…」

縁は、にこりと笑った。

「縁…この森 入ったことあるかい？」

咲は、神社の裏の森を指さした。

「うっん、興味はあるけど、迷子になるといけないから…」

「行こうか」

「え？」

「大丈夫、迷わないから」

「行ったことあるの？」

「ああ…心配ないさ」

縁は森を見て

「行きたい」

と口にし、立ち上がった。

「それでは、行こう。西瓜の礼だ」

「ええ」

咲は、縁に手を差し伸ばした。

縁は、指先からゆっくりと、咲の手に触れた。

互いの手と手が触れ合い終わる時、咲は力強く、縁の手を握った。

どきん。。。

「離れるなよ？」

「わかったわ」

8話

走る。

走る。

二人の手は離れない。

頬に風を滑らす。

木々たちが騒めく。

二人を導かせるかの様に。

森全体が歓迎する。

「ねえ、咲。いつになったら…」

縁の手を握り、走り続ける咲。

木々たちの隙間から零れ落ちた日差しで、銀色の髪はきらきらと光っていた。

走っている最中、面をつけた咲の横顔が、とても暖かく感じた。

ハ、と前方を見ると、崖のような段差があった。

「さ、咲、あぶなっ！！」

咲は縁の声など、聞く気もなく。

聞こえないかのように、走るのを止めなかった。

縁はギュ、と目を閉じ、唇を噛み締めた。

縁の腰をふわ、と何かが包み込む。

咲は、ジャンプした。

体が軽い。

「目を開けて…」

耳元で、咲の声が聞こえた。

目をゆっくりと開けてみた。

「わぁ……」

「どう、きれいだろう？」

「ええ、とつても…」

「そりゃ、よかった」

私は見た。

緑の園を…。

それは私が思い描いてたものより、遥かにきれいだった。

「ありがとう…咲」

少しして、縁は恐る恐る口ずさむ。

「ね、ねえ、咲？一つ聞きたいことがあるけど…良いかしら？」

「ああ？」

「わ、私たちこれからどうなるの??」

「ひひ、そんな恐がらなくても大丈夫さ。下は海だ」

あと、少しというところで、咲が口にした。

「目を閉じて…」

ひやり、と冷たい…。

その冷たさは、夏の日差しには、心地良かった。

目を開けると青空が広がっていて、私と咲は海に浮いていた。

9 話

二人はすいすい、と泳ぎ、岸をめざした。

「…死ぬかと思ったわ」

「あれくらいじゃ、死なないさ…」

「そうじゃなくて…死ぬかと思う程、恐かったってこと!!」

「ああ、そうゆう意味なのか…」

岸に着いた時には、二人ともびしょびしょに濡れていた。

あんなきれいなもの初めて見た。

深緑の森。

私は咲に聞きたいことが、たくさんあった。

そして、また一つ…それが増えた。

そして、今日も別々の家へと。。。

私と咲は、夏休み中、毎日ふらふらとした。

森。

神社。

海。

川。

私たちは、毎日笑った。

あなたと居た時間が、夏休み中に一番多かった。

いつか私に、あなたの全てを打ち明けて。

それが、あなたの重荷なら、私が支えてあげるから。

私は、あなたのことを何も知らない。

私は、あなたのことが知りたいの。

ねえ、あなたの口から教えて…。

これから。

少しずつでいいから。

私に…あなたのこと話して

夏休みが終わる時には、今より、あなたに近付けると良いな。。。

あなたが…少しでも私を必要としてくれたら…

私は咲に

「またね」

と言い、手をふった。

咲は何も言わず、手をひらひらとしてくれた。

また明日…あなたに会いに

あなたと出会った

神社に足を運びます。

だから…

あなたは、いつもの席に

座ってて。°°

10話（前書き）

評価、感想頂けると嬉しいです。。。

10話

カレンダーを眺めた。

夏休みも、終わりへと近づいていた。

夏休みというものは、あっという間に終わってしまう。

そして、今年の夏休みは
去年より特別だった。

「咲、もう夏休みも終わるわね……」

「……じゃあ、当分会えないのか」

「ふふ、夏休みじゃなくなつて……会いに行くわ」

「……待つてる」

「ねえ、咲」

「なに？」

「どうして面を外さないの？」

「たいした理由はない」

「??」

「でも、今…面を外してしまったら…俺にとって、この世界は広すぎる。何もかもが…窮屈だ」

「だから、面をするの？」

「…ああ」

「咲は…弱虫ね」

そう言うと、咲は、こくり、と頷いた。

「それより…縁のことを知りたい」

「わ、私！？どうして？？」

「…興味があるから」

咲は面から、私の目を真つすぐ見ていた。

「…そうね。私の趣味は、音楽を聞いたり、散歩すること。今年入って、思い出に残ったことは…あの森に入れたこと」

それと、咲に会えたこと。

咲は面を外さない。
いや、外せない。

世界、周りが恐いから…面で視野を狭くしているらしい。

それでも

いつか——…

その面に隠された

本当のあなたを知りたい

だから、それまで…

あなたの隣にいらせて。

あなたの傍が落ち着くから

11話

夏の熱さも

蝉の声も

日差しも

生温い風も

終わりへと近づいていた。

森が紅く、寂し気な

紅葉へと染まってゆく。

すると、次第にそこら中

秋の香りが漂う。

窓際の席から、その全てがわかる。

頬杖をつきながら、森の方を眺める。

「早く帰りたい」
ぼそ、と声に出す。

「……咲」

授業中は上の空。

ただ、あの場所へ――。
あなたに会いたいから。

「神野、次、移動教室よ」

真っ白だった頭の中で、声がした。

「え？あ、島波……」
しまなみ

私は、目の前にいる友人の名前を呼びなおした。

「島波、いつ授業はおわったの？」

「さつきよ。ねえ、神野…夏休み中に何かあった？？様子が変よ」

「平気よ。それに、夏休み中はずっと、人と遊んでたわ」

私が、そう言い終わると

島波は、前の席の椅子を引き、私と向かい合うように座り、言った。
「平気ならいいの。でも、心配なの…何もかも重荷にしているようで」
「ふふ、ありがとう。でも、心配しないで…もし、私が苦しくなったら、その時は相談するから」

「…約束よ？あたしは、神野が苦しむ姿や、辛い姿は見たくないの…」
「ええ…」

小指と小指を
絡めた。。

『やくそく』

子供じみた“約束”
それでも、そこに、形があった…約束という名の。

だから、この約束は尽きることはない。

島波…ごめんね。
もし、あれが私の重荷になって…私が苦しく、辛くても…私はきつと、きつと…あの人を手放せない。
手放したくない。

だって、今も、会いたくて…会いたくて、たまらないんだもの。

ごめんね、島波。。

12話

深緑の森を紅葉が少しずつ、紅へと染めてゆく。

しかし、森に一番近い、神社から見ても、まだ、緑が多かった。

落ち葉も、淋しそうに地に落ちて―…秋の始まりをも感じさせられた。

私の隣では、面を付けてるあなたが寝息をたててた。

静かな神社で―…

一定の呼吸と―…

面越しに見える横顔―…

あなたの細く、白い手が…微かに震えていた。

「――……咲？」

細い指に、そつと自分指を当てる。
そして、手を握ってみた。

咲の手は、意外にも大きかった。

そして・・・
ひんやりと
冷たかった。

そのせいか、咲の手を触ってることを忘れ、いつの間にか歌まで歌っていた。

* * *

「――もう、終わり？」
「咲…起きてたの??」
「ああ、なんで…歌うのやめた??」

「止めたんじゃないわ。これで終わりなの」

「中途半端だ…」

「そうね、でも、良い歌よ」

「そういえば…」

「ん？」

「初めて会った時も、それ歌ってた気が…」

縁は瞳をつぶり、考えた。か、と思うと思い出したかのように、瞳を見開いた。

「そ、そうよ。歌ってたわ」

「ひひ、記憶力良い」

「え、でも、なんで??」

「何が??」

「…よく聞こえたわね」

そう、初めて会ったあの日…私とあなたの距離は、神社から鳥居までの距離と、そう変わらなかった。

だから、□ずさんの歌は、鼻歌同様…小さなはずだったのだ。

「簡単に言えば、この神社の周りは…おれのテリトリー」

「テ、テリトリー？」

「そう…それに、縁が思ってる以上に、声は大きかった」

「え、うそ!」

「ほら、いつも声が小さいから…こういう時、大きく聞こえるんだ」

私は、頬に手を当てた。

…恥ずかしい

そう思っていた矢先、咲はさり、と言った。

「でも、綺麗な声だった…だから、歌を歌うのは止めないで…」

彼のその一言で、私の頬は赤くなった。

りんご色に染まった頬。

それを静めるのに、どれほどかかっただろうか？

13話

私と咲の会える時間が、削られてゆく。

今はもう、学園祭の時期だった。

催し物があるクラスは、それに向けて準備を進めていた。
勿論、縁のクラスもだ。

だから、学校で居残りの
日も多かった。

「えっと…我が校も学園祭の時期がやってきました。そこで、今日は自分達のクラスの出し物を決めて、準備に係りたいと思ってます。何か、やりたいと思う出し物がありますか？」

学級委員が、そう言い終わると男子たちは、すかさず手を挙げる。

「おばけやしきー!!」

「喫茶店」

「フリーマーケット」

様々な意見が、学級委員に飛んでくる。
そして、どれもこれも有りがちなものばかり。

「ストップ!!」

委員長のその一言に、みんな口を閉じた。

「書記さん、黒板に書いてください」

「はい」

副委員は、黒板に挙げられた意見を、すらすらと書いていった。

「こほん、それでは皆さん、ここからは…多数決としましょう」

委員長は咳払いをすると、にやり、と笑った。

「それでは…」

*

*

*

結局、クラスの催し物は“おばけやしき”となった。

「ねえ、神野くんの役する??」

「ええ、私は、受け付けでいいわ」

「さっき話きてた?クラス皆、仮想はすれ、って言うてたこと」

「でも、やる役ないし…」

「それなら大丈夫、縁は、花子さん」

「え?」

「トイレの花子さんの役で、受け付け決定!!」

「島波は何するの??」

「あたしは…」

14話

「普通に白い着物きた女役A」

「へえ〜つて、AってことはBもいるの!？」

「うん、あと3人くらい」

「私もそれが良かったわ」

「だめ〜神野は花子!!」

夕焼け空。

神社へと足を運ぶ。

「咲??」

神社には、誰も居なかった。

「縁?何しに来たんだ?」

後ろから聞こえたその声に、私の顔が和らぐ。

「咲っ！！」

「今日は、来るはずじゃなかったろ？」

「うん、でもね…学園祭の準備、明日からの」

「ああ、それでか。頑張りな…」

頭を軽く、ぽん、と叩かれた。

「で、学園祭では、何をするんだ？」

「えっと…お化け屋敷」

「ふうん、縁は??」

「わ、笑わないでね!？は、花子さん役で…受け付け」

「花子??」

「と、トイレの…花子さ」

「ひっ、ひひっ」

全部言い終わるまでに、笑い声が聞こえた。

そして、口に手を当て、必死に笑いを堪えようとしてる姿が、そこにあった。

「わ…らった…」

「す、すまない。しかし、花子で受け付けとは…」

少し間が開き、口を開いた。

「私のクラス、仮装、全員参加だったの」

「ほう」

「学園祭の準備あっても、たまに、顔見せに来るわ」

「またね、咲」

私はひらひらと手を振った。

ほんの僅かな時間を
私は
惜しんだ。

もっと。。。

もっと。。。

…一日が長ければ良いのにしたら、
今よりあなたと長く居れるか
ら。

15話

「そっち暗幕はって!!」

「はいっ」

真っ黒な、暗幕を壁の端から、端へと広げた。

光が、教室に入らない様、窓側は二重に幕を貼った。

「ねえ…これ、何作ってるのかしら?」

縁は手の作業を止めず、口を開いた。

「そうね…強いて言えば…トイレ」

「うん、わかるよ。でも、なんでトイレが必要なの?」

「花子さんが入るため」

「花子さん、もう一人いたのね」

目の前で作業してる島波は、ちら、とこちらを見ると下を向き、ぼそ、と口にした。

「……いない…」

「…ええ!?何、もしかして私が入れてこと!?!」

「うわぁ…神野 頭良い…」

「私、受け付けが…」

「神野、私もだから…おばけ役」

「なんで??」

「おばけ役が一人 捻挫しちゃってるからよ…」

「うつ…」

「…わかったわ」

「頑張ろうね」

島波は、まばゆい笑顔で言った。

* * * *

縁たちの教室内は、真っ暗な闇と化していた。
墓や、柳の木などの作りものが並べてあった。
そして、トイレも…。

「すごい、すごい!!」

「結構…良くねえか？」

「おお、後は…薄暗いライトと衣裳だけ」

ライトにアルミホイルをぐるぐる巻き、教室内にセットした。

「衣裳係り…どおだ？」

「……できたっ」

「うおおお、すげえ」

「花子さんの衣裳が、これで…着物の女性がこれ」

「あ、ありがとう」

「いゝえ」

花子さんの服は、ブラウスに赤いスカート…におかっぱのカツラ。

「やだぁ…神野、ちび●るこちゃんみたい…かわいい!!」

「いや、花子さんだから」

「って、そつゆう島波も似合ってるわよ?」

「そつ?」

腰までの髪、白く長い着物。。。

学園祭前日に、全部を作り終えた。

明日が当日だというのに、そんな気がしなかった。

その日の夜は長く、月がちよこんと顔を出していた。

16話

学園祭当日は、一気に祭り騒ぎが頂点へいった。

縁たちのクラス以外では、喫茶店やフリーマーケット、ゲーム店を出しているところもあった。

「はあ… やっぱり、受け付け役が良かったわ」

「もう、遅い」

『チャリン、チャリン』

その音で、場は静まり返った。

トイレが錆付いた音をだし、その間に後ろから髪の長い女の人…
後ろに気を取られて、前を見ると服を引っ張ってる花子さん…

『「一緒にあそぼ…」

』

縁の声と機械の音が、コラボしてできた花子さんの声。

他にも柳の木の下では、下からでてくる薄暗いライトで、顔を照らしてる島波…あ、いや、女の人。

墓の後ろは、呻き声を出し、赤ん坊を抱いてる女の人。

他にも、様々なお化け役がいた。

（今ごろ、咲は何をしてるんだろう…）

「おい、神野の休憩よ？」

「……うん」

「どこ行く？」

「えっと」

「……神野さ、やっぱり何か隠してない？？」

「……うん」

「占い…でその後を占ってもらいましょ？」

3-4のクラスは「占いの館」とゆづのをやっていた。

「すいませえくん!!」

「はい?」

「この子…占ってもらって良いですか?」

「どうぞ、何を占います?」

「あ、あの、最近会った少年のことで…」

小さな声で縁は言った。

「わかりました」

そのとき、占い師が何をしたか、なんて覚えてる訳もなかった。

「その少年は…ふ、と現れて、また貴方の元で、本来在るべきところへとゆくでしょう」

「本来在るべきところ?」

「はい。そして、貴方は少年に沢山のモノを貰っていると同時に、その少年も貴方に何かを貰ったはずです」

占いはそれだけ言っと、否、口を全く開かなかった。

17話

ひらひらと木の葉が
落ちてきた。

木は寒そうにゆれている。

月日は、あ、という間に経っていた。

「もう、冬だね」

彼女の声が聞こえた。

「マジ寒いんだけど…」

「うん」

「縁も此処にくるの辛くないか？」

「うん。でもね、咲に会えるからいいの」

彼女は頬笑んだ。

とても

優しく。。。

「雪積もつたらさ、また森に行こう」

「本当に!？」

「ああ、次は反対側の…：そしたら、雪にダイブが出来るから安全だし」

「わぁ〜楽しみっ!!」

彼女の笑顔が

彼女の周りが

暖かく

安心できて

居心地よかった。

「早く…積もつてくれないかな」

「さあね」

「あ、そうだ！！神様をお願いすれば良いんだわ」

「わっ、バカ！！神様に失礼だろ！？」

「うう……」

彼女は桃色の頬をぷくう、と膨らました。

なんて…愛しいんだ。

もう、少し

もう、少しで

手が届きそうなのに

引っ込めてしまう

自分がいる。

彼女が遠くなってゆく

俺が…

俺が彼女に伝えなければ

きっと、このまま
遠いんだろう。

距離は縮まらないのだろう

ただ、一言ゆえば
良いんだ。

そして、過去を
話せば良いんだ。

本当のことを
受け入れてもらおう。

だって、それが
彼女のためであり
俺のためでもあるから。

18話

「みて咲！…雪よ」

「うん」

「雪よ！…」

「うん」

「森へ行きましょう」

「……やっぱり」

ぼそ、とため息混じりの声が聞こえた。

「?？」

「さて、行くとするか」

咲はすぐ、と立ち上がり、ズボンを叩いた。

「ええ」

「今日は走るのは止めよう。危ない」
「わかったわ」

森の入り口に入った。
木々を避けながら、先へと進む。

「ねえ、咲」
「なんだ？」
「咲は……」
「??」
「なんでもない」

「ほら、ここだ」

下を見れば、真っ白で
きらきら輝いていた。

「ちょっと、怖い」

「何いってんだ。行くぞ」

とん。

ぼふ。

「ねえ、咲は妖怪??」

「いや…違うよ」

「それじゃあ…人間??」

「何だと思う?」

「わからない。でも、遠いモノの気がする」

「俺も縁が遠く感じる」

「どうしてかな。こんなに…近くにいるのに」

隣にいるのに。

「さあ…どちらにせよ、俺には難しいよ。」

そう呟く咲は
とても淋しそうだった。

チュン、チュン。

雀たちが空から降りてきた。
咲の手元まで。

「ひひ、鳥だ」

「雀よ……」

「小さいなあ…羽も体も。でも羽があつて…自由に空が飛べて…良
いなあ」

咲の白い吐息と

雀の奏でいてる音色

寂しさをも感じさせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1874b/>

君との距離

2010年10月28日07時01分発行